

創造的展開を啓発するための「授業対話」の研究 —学生に対する〈日々のドローイング課題〉を媒体として—

小澤基弘（教育学部・教授）

1 研究目的

本研究は、絵画指導における「対話（プロトコル）」と学生の絵画に現れる創造的展開との相関を、学部実習「絵画応用実技Ⅰ」における前期課題〈日々のドローイング制作〉を通して検証し、言葉と表現展開の相関に関する仮説を導き出すことを目的とする。本研究は、新学習指導要領に新たに加わった言葉と表現の密接な相関に対処するものである。一日一枚のドローイング課題を一週間ごとに提示させ、教員（小澤）と受講生との対話をデジタル録音してプロトコル化し、同時にドローイングを接写して画像データを作成する。前期終了時において、受講生全員のダイアログとドローイング画像を時間軸に従って整理しドキュメント化する。そのドキュメントを解析することによって、どのような語りかけ（言葉）が各学生の表現の展開や飛躍を導いたのか、言語とイメージ表現の展開や飛躍との相関を臨床的に検証することで、そこに絵画教育の質を促進する対話のあり方はいかにあるべきか、その教育的な普遍性を見出すことを目的とした。

2 研究の経過

上記目的を実現するために、研究協力者である大学院生二名とともに計画通り受講生 13 名全ての毎回の教員小澤との対話を記録し、音声記録を完全文字化するとともに、全員のドローイング画像を全て撮影し、日付順に整理し、対話記録と画像記録が常に連動するように記録を編集した上で、受講生毎の DVD を作成した。各データは、全受講生に前期授業終了後に配布し、各自がその記録と画像データを省察してレポートを提出することを義務付けた。つまり、各受講生が自らが描いたドローイングについて教師とどのような対話を展開したのか、またその対話から自分自身の表現の何に気づき、それを次回ドローイングにどうつなげていったのか、各自がこの記録に基づいて内省しそれを文章化することによって、絵画授業における「対話」の果たす役割と機能を分析するための素地作成を、昨年度前期において完了した。また本プロジェクトには含めていないが、後期にはドローイングからの作品化（タブロー化）を目的として授業を継続し、ドローイング対話の集積が、その後どのような作品化をもたらすのかについても、毎回の制作記録を主体的に行わせ、最終的な作品に至る過程を記録し編集した。

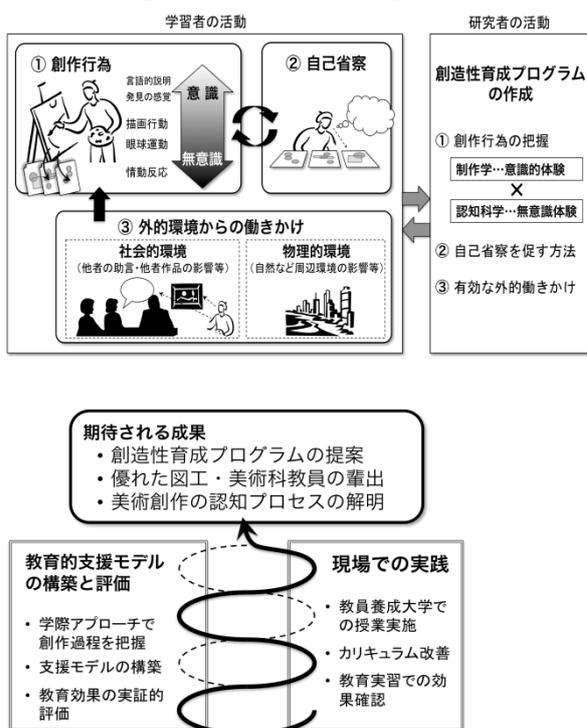
3 研究の成果

前述のように現時点では、対話記録の整理と編集、各受講生の内省レポート、そして作品化のプロセス記録という、本プロジェクト実現のための基盤となるデータは確実に整えられた。そうしたデータ集積によって、平成 23 年度科研費基盤研究 (A)「教育系大学にお

ける教員養成のための創造性育成プログラムの開発」が着想可能となり、採択されることとなった。この科研費研究の目的は、図工・美術科教員を志望する大学生のための創造性育成プログラムを、認知科学の視点も含めながら開発することである。図工・美術科教育においては、教師は知識を教えるだけでなく、児童・生徒の表現・創造活動を支援することが求められる。教師が有効な創造性支援を行うには、教師自身が①表現・創造活動の豊富な体験を持ち、②その体験に基づき、自らの表現・創造活動に関する伝達可能な知識を獲得していることが必須条件である。そのような学校教員を育てるためには、大学の教員養成の現場においてまず美術創作活動の教育的支援モデルを構築し、それに基づいて「創作に関する省察を促す教育プログラム」を開発し、大学生を対象に実施し、その教育成果を小中学校の教育実習の場で臨床的に検討する必要がある。この研究は筆者と認知科学の専門家との共同研究の形で進めていくこととなっている。以上の創造性育成の教育支援モデルを構築するための、最初のがかりとして、本プロジェクトの成果が果たした役割は極めて大きかったと言える。

本プロジェクトで行った同じデータ収集を平成 23 年度以降も行うことによって、分析の精度を更に高めていくことが必要となる。それが科研費研究のために必須である。また、同時に大学における絵画教育の場に留まらず、地域の公的機関において展開されている生涯学習における美術の指導についても、ドローイングをテーマとして同様のワークショップを展開し、同じように記録し分析することで、学校教育だけにとどまらない射程での創造性育成プログラムの構築も目指していきたいと考えている。

【今後の研究のイメージ図】



【授業展開と記録の関連図】

